

目的 和装の着装時における形態ことに直立前面より観察すると、(1)- 衿幅部分、(2)- 肩より帯まで部分、(3)- 帯幅部分、(4)- おはしより部分、(5)下の部分と、横に五分割される。この分割の比率の大小の相違が、和装を着装した際の美的効果に重要な要因となる。着装者の体型の変化と共に、着装の仕方(ことに、腰紐位置)の変化等考えられる。年次による五部分分割比率を数値化し、変化を調べ、平均年次別比率を算出し、同一モデル、長着を使用し、その比率に合わせて着装し、最も和装の美的効果を出し得る五部分分割比率を官能検査により考察する。

方法 年次別分割比率を、より多くの資料より集計し、数値化し年次ごと平均値を算出する。ウール着尺地長着による着装実験を行った。着装条件は、標準体型モデル2名(独身者女性、既婚者女性)同一長着を用い、年次ごと平均比率に合わせて着装し、写真撮影する。同一倍率に引き伸ばし、官能検査資料とし、和裁専門家、和裁経験者、着付指導者、和服愛用者に依頼し、一対比較法、順位法の二通りの試験を行ない、和装をより美的に効果あげ得る五部分分割比率を比較検討した。

結果 年次により多小の変化傾向がみられた。和装の着装時五部分分割比率で、和装の特性を生かし、日本人の体型に合い、より美的効果を出し得る着装比率は、昭和50年代の(5)- 下の部分の比率が大である着装の仕方、いわゆる足長的着装時比率ではないことが、認められた。